

女子教育の30年を振り返って ～松山東雲女子大学の30年～

Thirty Years of Women's Education in Matsuyama Shinonome College

松山東雲女子大学第5代学長 塩崎 千枝子

Chieko SHIOZAKI

(松山東雲女子大学元教授)

もう30年数年も前のことになるが、松山に居を移したのを機に、私は短期大学英文科の教員になった。女子校は初めての経験で、その華やかな雰囲気や眩しく、明るく元気な学生たちとの交流はとても楽しかった。当時、大学のキャンパスは若い学生の占有の場だったが、社会人学生として米国の大学で学んだ自分の経験から、日本でも是非、社会人にも開かれた多様な価値が交錯する大学キャンパスを実現しようと、1991年に学園オープンカレッジの開設に漕ぎつけた。社会人向けの公開講座だけではなく、社会人に正規授業の聴講をも認める取り組みは、当時の日本の大学文化には馴染みがない新しい試みとして注目された。本学園の開かれたキャンパスづくりはその後も継続し、今日まで女性活躍への学び直しのキャンパスとして重要な役割を果たしてきたことを大変嬉しく思う。

時は昭和から平成に移る頃で、バブル崩壊以降の経済停滞はまだ長く続いており、短期大学の人気は高く、学生募集は堅調であった。18歳人口がまもなくピークアウトすると予想されていたものの、大学進学率の上昇により当分は学生数が確保できると見込まれた。1985年の男女雇用機会均等法成立を機に、「女性の社会参加」への意識が高まり始めた時期でもあった。愛媛でも女子の高等教育進学率はこれから高まると予想され、女子教育の伝統の学府として、東雲学園はより積極的に地域と時代の要請に応えたいという意気込みが四大設置構想に繋がった。大先輩の那須野、石丸両先生、植松事務長、そして同僚の青野さんと私の5人で大学設置準備委員として大学構想を練り、侃々諤々の議論を重ねる日々が続いた。

男女平等の時代に今さら女子大にする意義は何か、共学にすべきではないか、など、教員間でも熱い議論が続いた。私自身は共学志向に傾いていたが、学園の歴史、伝統、ミッション、時代の変化への対応、ニーズ、コストなど、様々な角度から検討する中で、伝統を守りつつ新しいものを創ることの難しさと面白さを勉強させてもらった。

1992年春、ピンクの新校舎も完成し、四国唯一の女子大学としての期待の中で人文学部に人間文化学科と言語文化学科の2学科を持つ松山東雲女子大学が開学し、初代学長に元神戸女学院学長

の岡本先生が着任された。

女子大学は、教養系大学として、学生の主体性を重んじる自由度の高いカリキュラムを特長とし、4年間の幅広い学際的な学びを通じて、自律的な探究意欲と自立能力の涵養を目指しており、2年間で資格取得を目指して体系的な専門教育を提供し、専門職への就職実績を誇ってきた短期大学との間に、教学面でのアプローチや学生との関わり方の違いが次第にはっきりしてきた。学生募集、学生生活支援、就職指導などでもそれぞれのやり方で動く両大学を一つの組織で支えてきた大学事務の皆さんは、随分苦勞も多かったのではないかと、今改めて関係者の努力に頭が下がる思いである。

2つの異なる大学組織が隣り合うことは難しさもあったが、多様なキャンパス文化を育てる強みともなってきた。多様化する学生ニーズに如何に応え、良質な教育を提供していくのか、各大学、学科が互いの個性を認め合いつつ協働する努力と、そしてそれらを包摂する東雲教育の共通の価値とを求め続けてきた30年間であったように思う。

女子大学はこの間に時代の変化に応じて何度かの名称変更や改組を行い、徐々に専門資格の取得も強化してきた。現在は人文科学部心理子ども学科のもとに子ども専攻と心理福祉専攻の2つの専攻課程を置き、現代社会の大きな課題となってきた「子ども」と「こころ」を学びの中心に据えた専門家育成に取り組んでいる。

生まれたての大学の基礎固めのために歴代学長には力を発揮していただいていた。岡本初代学長はキリスト教精神に基づく教育理念とリベラルアーツの本髄を示され、女子大学の礎を築かれた。第2代別府学長は、女性活躍の時代を魁る学生憧れのロールモデルとして、一人ひとりを大切にす女子教育の実践に力を尽くされた。第3代の磯村学長は短大の学長も兼務され、漸く実現した学長一人体制で、両大学の連携と、キリスト教精神の伝統を大切にされた教育環境づくりに尽力された。第4代の棟方学長は経済界での豊富な経験を活かして大学マネジメントに当たられ、生き残り戦略をかけたビジネスモデルとして大学の将来戦略を導かれた。

大学の30年の歩みはでこぼこの山道続きのようであった。年々忙しく、厳しさを増す学生募集に走り回り、多様化が進む学生のための豊かなキャンパスづくりに汗をかき、配慮を必要とする学生のためにきめ細かいサポート体制を用意するなど、教学面以外の仕事も増え続けた。両大学の共同歩調も少しずつ整い、教職員挙げて良く努力をしてきたと思うが、頑張ってもなお、その先が見通せない徒勞感もあった。

私は2016年から学長職を一期務めさせて頂き、大学運営の大切さと難しさを学ぶこととなった。全国の大学で生き残りをかけたガバナンスの強化と教育改革の努力が加速化し、日本の大学に大きな質的転換が起きつつあった。先行する他大学の改革への取り組みから、それまでの真面目な努力だけでは通用しないこと、それらの努力がアカウンタブルであるどうか、その成果が検証され、評価され続けなければならないことを、そして何よりも先ず、大学教育には明確なビジョンと戦略性がなければいけないことを教えられた。

大学の管理運営および教育活動全体の構造改革が喫緊の課題であった。ディプロマ、カリキュラム、アドミッションの3ポリシーに基づく教育体系の見直しと再構築、そして自己点検と評価の徹底による教育の質保証という重要課題に取り組み、大学教育とは何か、教育力をいかに高めるかを考え続けたやり甲斐のある、しかし根気がある地味な日々が続いた。全学挙げて取り組んだ極めて重要な過程であったが、直接の教育活動ではなく手応えの得にくいデスクワークの繰り返しに、教職員の間に疲労感が募っていくのを感じていた。

カリキュラム改革の一つの柱として取り組んだのが共通カリキュラムの導入であった。各大学、学科が別個に置いてきた教養系科目を整理統合し、共通の時間割枠に配置し、所属を超えて誰でも受講できるように図ったもので、教養科目群の体系的整理、非常勤講師の経費削減、大学と短大の学生および教員間の交流の促進、そして地域との協働による東雲ブランドの講座開発などの目的を併せ持ち、両大学の協働を実体化する一手として大事な改革であったと思う。だが、多くの教職員を巻き込み煩瑣な作業を強いることになってしまったことは申し訳なかった。

今、短大時代から慣れ親しんだ旧校舎の跡には明るい新館が建ち、一面にクローバーが広がる中庭には四季折々の花が咲く美しいキャンパスが整備された。友や学生たちと泣き笑い、長い月日を共に過ごした大学は、私にとっても大切な学び舎であった。コロナ禍で簡単に訪れることも叶わなくなりましたが、学生や教職員のことがいつも気にかかっている。

松山東雲女子大学が創立30年を迎えた今日、わが国の高等教育が大きなパラダイム転換を求められる中で、選ばれる大学であり続けるためにどうすればよいのか、地方の小さな女子大学の使命と役割をこれからも問い続けることになるだろう。

変化が激しい不確実性の時代は、自ら学び、多様な他者と協働しながら新たな未来を創る意欲と能力をもった人材を求めている。大学にとっては厳しい時代が続くが、女性が生涯を通じて豊かに学び育ち、やがて世の礎となって人と社会のために働くことのできる人となるために東雲教育があると信じている。良き伝統を守りつつ変わる勇気と力を持ち、これからも時代を魁る人材育成の大切な使命を果たして行って欲しいと切に願っている。